

連合 労働運動の存在感賭け、 第2期古賀丸が船出

飯田康夫（労働ジャーナリスト 日本労働ペンクラブ前代表）

（労働調査会、今月のテーマ…2011年10月 その2）

労働運動に明日はあるか。いまのままの運動を続ける限り、社会的な存在価値は希薄になるだけ。労働運動は、冬の時代を迎えている、あるいは、迷い道から抜け出せないでいる。崖っぷちに立っている労働運動など、極めて厳しい指摘が繰り返されてきた労働界。

これら労働界への厳しい注目の裏には、社会改革の担い手の一つの軸である労働運動再生への熱い期待が込められていると見たい。そこには、低迷から脱出し、労働運動の存在感を高めてほしい、元氣出せ、労働組合というシグナルを読み取ることができる。

その矢面に立つ「連合」が10月4、5日の両日、東京・有楽町の国際フォーラムで、第12回定期大会を開き、「復興・再生に全力を尽くし、働くことを軸とする安心社会につなげよう」をメインスローガンに、2012～2013年度の運動方針を決め、古賀伸明会長（電機連合出身）―南雲弘行事務局長（電力総連出身）ラインを再選、第2期古賀丸はスタートを切った。

果たして、労働運動の再生へ向け、存在感のある、思い切ったカジ取りができるのか、責任の重みをしっかり受け止め、行動する連合、主張する連合、弱者に目を向け、その成果が労働運動の外にいる未組織の労働者に届けられるのか、その手腕が注目される。古賀会長のあいさつを中心に、主要なテーマに絞って、その意図を追ってみた。そこから労働運動の存在感・再生への道筋が読み取れるかは、若干疑問ではあるが、連合の姿勢の一端を垣間見ることができそうだ。

連合大会終了後の5日午後の記者会見で、古賀会長は次のように決意を語った。

「いま、私たち連合が取り組むべき課題は山積しているが、緊急かつ、重要な視点としては、二つの大きな課題に挑戦したい。その第一は、連合の組織牽引で、東日本大震災への対応―復旧・復興から再生に全力を尽くすこと。そのためには、雇用の創出・維持は必須条件で、働くことで、日々の暮らしを取り戻し、職場と地域の再生をはかること。その第二は、めざすべき社会像として連合が提起する『働くことを軸とする安心社会に向けて』の運動で、働くことに最も重要な価値を置き、多様な働き方を通じて、自立、支え合い、つながり、絆を大切にする社会をめざす。これらの理念を、あらゆる層で共有していくことだ」と強調した。

これら言葉の羅列は、美しいし、誰も反対のしようのない文言であり、内容である。問題は、如何にして、具体化し、行動に結びつけるかがカギを握る。トップリーダーには、自覚と責任の重みを噛みしめ、政労使に加え、あらゆる層を巻き込んだ運動の展開を期待するばかりである。

古賀会長の語り口からは、第一に、東日本大震災の復興・再生が、連合労働運動の最優先課題であるとの位置づけを強く印象づけた。その背景には、大震災発生直後から連日、東北3県を中心に震災地へ

組合員ボランティアを延べ日数計算で3万5千人という民間組織では最大規模の派遣をしてきた実績と地域に顔の見える連合救援活動への自信がそう言わせたといえる。

古賀会長は大会冒頭のあいさつでも「一人ひとりには微力でも、組織として結束して動けば大きな力となる。まさに労働運動の本質を再確認した」というように、数は力であることを示した。確かに組合員680万人を誇る連合の組織は、ビッグではある。だが、物分かりが良すぎて、おとなしくなった労働運動は、あらゆる場面で、労組の出番があるにも関わらず、主張し、怒りを爆発させるなどの行動力も存在感も希薄だった感じがしてならない。

連合は、2010年から「すべての働く者」を対象に運動を組み立て、未組織労働者など弱者に運動の力点をおくとの路線を打ち出したが、十分に機能しているとは言えない状況にあった。それが大震災を契機に組織力の発揮こそ労働運動の本質であることを改めて自覚、大会参加者に強くアピールしたかった古賀会長の心境をあいさつの中に読み取ることができる。やろうと思えば、できるのだ、というメッセージを組合員に発信したわけだ。

さらに、福島第一原子力発電所の事故とその対応、それに続く、エネルギー政策課題について、古賀会長は「総点検・見直しに当たって、『脱原発』や『原発推進』という二項対立の議論は行うべきではない」とした上で、「安全・安心・エネルギー安全保障を含む安定供給・コスト経済性・環境の視点から短期・中長期に分けた冷静な議論を行う必要がある」と主張。

「原子力エネルギーに代わるエネルギー源の確保、再生可能エネルギーの積極推進、省エネの推進を前提として、中長期的に原子力エネルギーに対する依存度を低減していく、最終的には原子力エネルギーに依存しない社会をめざしていく必要があると考える」と述べ、直ちに、脱原発というわけではないと

の姿勢を明らかにした。マスコミ報道では、脱原発をめぐって、連合内で軋轢が生じていると報じられていることに触れ、連合会長として脱原発の言葉は一切発していないと釘を刺した。

さらに、連合・古賀会長発言で注目されたのが、「政権交代とは一体何であったのか、何のための政権交代といえるのか」など、民主党政権誕生の最大のサポーター役を任ずる立場から、民主党への厳しい注文である。

古賀会長は、「民主党が国民の生活が第一、政治主導を掲げ、政権交代を実現、期待に胸を膨らませた。だが、残念ながら鳩山・菅の両政権は、いずれも総理の指導力の課題が指摘され（指導力の欠如といった表現でなく、配慮した表現か）、思慮を欠いた発言などで、政局の混乱に引きずられ、国政の停滞、混乱を招き、重要課題が先送りされるなど機能しない政治が続いた」と民主党の政権与党としてのトップリーダーの資質の欠如を厳しく問いただした大会冒頭のあいさつは、注目を浴びた。

そして、野田首相の前に「民主党政権再生のラストチャンスだ。そのことを党全体で共有し、党内対立を乗り越え、知恵と行動と組織力を結束し、対応するのが急務だ」と注文をつけた。まさに最大のサポーターから、何のための政権交代であったのか―民主党へ最後通牒を突きつけた感すらあった。蜜月の関係にあった連合と民主党。今後の行方が気にかかる。

<http://www.chosakai.co.jp/alacarte/all-10-2.html>

◇現代労働組合研究会のＨＰへ（ＴＯＰ）

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm>

◇ Ctrl キーを押さえながら上のアドレスをクリックすると、掲載サイトに行きます。